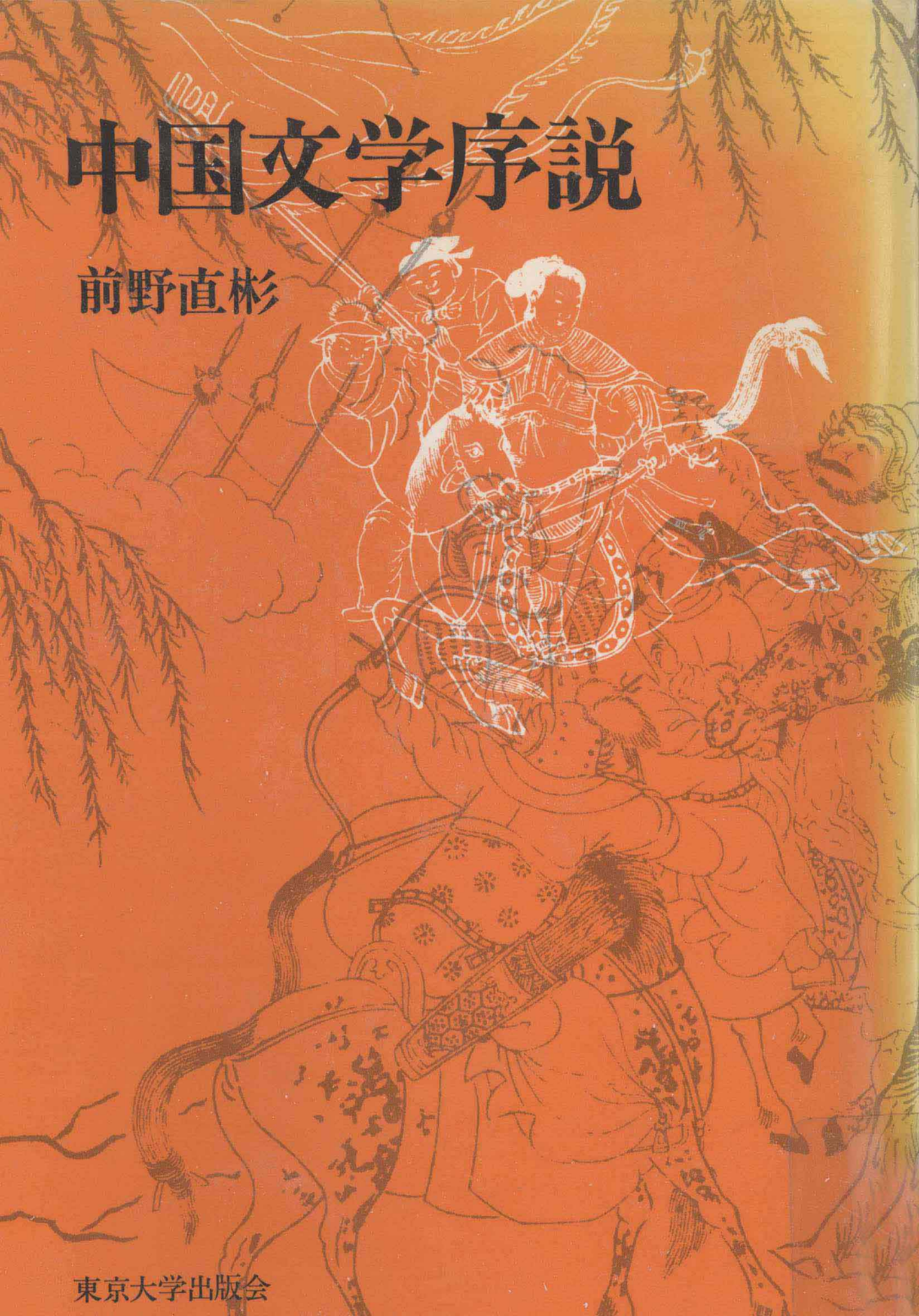


中国文学序説

前野直彬

東京大学出版会



中国文学序説

前野直彬

東京大学出版会

著者略歴

1920年 東京に生れる
1947年 東京大学文学部卒業
1968年 東京大学文学部教授
1981年 同、停年退官。東京大学名誉教授

主要著書

「唐詩選」(1961-63年, 岩波文庫)
「陸游」(1964年, 集英社)
「六朝唐宋小説選」(1968年, 平凡社)
「唐代詩集」(1970年, 平凡社)
「唐代の詩人達」(1971年, 東京堂出版)
「風月無尽」(1972年, 東京大学出版会)
「中国文学史」(編, 1975年, 東京大学出版会)
「中国小説史考」(1975年, 秋山書店)
「韓愈の生涯」(1976年, 秋山書店)
「蒲松齡伝」(1976年, 秋山書店)

現住所

東京都豊島区西巢鴨 1-3-1

中国文学序説

1982年4月20日 初 版
1989年4月28日 2 刷

[検印廃止]

著 者 まえの なかあき
前野直彬◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 菅野卓雄

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社三陽社
製本所 誠製本株式会社

ISBN 4-13-082038-9

目 次

第一章	中国文学の領域	三
第二章	中国語と中国文学	一七
一	文言と白話	一七
二	典故と対句	二七
	典故(二七) 対句(三四)	
第三章	中国文学史の時代区分	四三
一	古典文学と現代文学	四三
二	中国文学の発展	四四
第四章	中国文学のジャンル	七一
一	韻文文学	七一
	詩(七一) 詞(八三) 曲(八八) 賦(九八)	
二	散文文学	一〇一
	駢文(一〇二) 散文(一〇五) 小説(一〇八)	

第五章 中国文学の社会的地位 一九

一 文学の定義 一九

二 文と詩 二六

三 戯曲・小説 二九

四 科挙と文学 四三

第六章 中国文学の作者と読者 四七

一 宮廷詩人 四七

二 文学者の独立 五五

三 新興の士人たち 五九

四 都市の商人 六四

五 学者と学問 七〇

六 革命家と大衆 七七

第七章 中国文学の作品 八三

一 印刷術の発明以前 八三

二 印刷術と出版業 八六

三	図書館と蔵書家	一九四
四	四部分類法	一九九
五	別集のできるまで	二〇五
六	新しい印刷技術	二一四
	あとがき	二一九
	中国文学史略年表	
索引		

中国文学序説

第一章 中国文学の領域

中国文学とは言いまでもなく、中国人が中国語を用いて作り、中国人によって先ず鑑賞された文学である。ここで中国人とは、いわゆる漢民族をさす。現代の中国は、いわゆる少数民族を多く含んでおり、この情況は、民族の種類は変っても、歴代を通じて存在した。これらの民族にも文学が存在しなかったわけではないが、この点については後に述べる。

当初に述べたことは当然のようではあるが、ここに中国文学とヨーロッパ諸国の文学とを分ける大きな差異の一つが存在する。中国の国土は全ヨーロッパと同じくらいに広いが、そこに住む人間の大多数は漢民族であった。そしてこの民族の文学は、長期にわたって、ほとんど孤立の状態を続けていたのである。ヨーロッパ文学は英文学・仏文学・独文学などと分れるわけで、その一つ一つが中国文学に対応するわけだが、どの一つを取ってみても、中国文学のような孤立した存在ではない。シェークスピアがゲーテを動かし、ハインがフランス文学に影響を与えたというように、一国の文学は常に他の国々において鑑賞され、批評された。その一方、イギリス人がフランス語によって『サロメ』という戯曲を書くことも可能だったわけである。このような状態は、十九世紀末に至るまで、中国文学には見られなかった。

中国はその周辺に、漢字文化圏とよばれる衛星国を持っていた。日本・朝鮮半島諸国・ベトナムなどがその主要なものである。これらの国々には、ある時期において、中国語とともに漢字が輸入され、その民族の言語と結合して、後世にまで使用された。その中で、言語・文字のみならず、中国の文学をも鑑賞し得たのは、日本・朝鮮・ベトナムに限られるであろう。ただし、朝鮮半島とベトナムはかなりの期間、中国の版図内にあった。完全に外国にして中国文学を理解したものは、日本のみに限られる。

ところで日本について言えば（朝鮮・ベトナムでも同様であったが）、中国文学を鑑賞するのみならず、それを模擬した文学の制作されたこともあった。いわゆる漢詩漢文がそれである。しかしこれらはすべて、非常に變則的なものであった。というのは、この模擬文学は、漢字を用いてはいるけれども、中国語を使用してはいないからである。日本の知識人は奈良朝以前は別として、日本文化が全面的に大陸文化の影響下にあった時代においても、（弘法大師のごとき留学生は別であるが）ほとんど大部分が中国語を知らなかった。だから日本人の作る漢詩漢文は、漢字こそ用いてはいるが、要するに日本語で作られているのである。それでも韻律いんりつの規則の上に作られる漢詩の場合は、中国語は知らずとも、いちおう中国語に近いものは作り得る可能性がある。しかし、散文の場合にはそうはいかないから、日本人の書いた漢文は、多くの場合、中国語として読むことが不可能なのである。平安朝の公卿の日記、室町から江戸へかけての漢文の法令・規則・記録の類を見れば明らかであろう。したがって日本人の作った漢詩漢文が、中国に逆輸入され、中国人の読者を得たという例は、ほとんどない。頼山陽の『日本外史』が中国人を感心させたというのも、つまりは中国語の模倣の巧みさが取上げられたに過ぎないのである。つまり中国文学は、極東全域という、一民族の文学としてはきわめて広大な勢力圏を持っていたわけではある。

が、その内部は、ヨーロッパ諸国の文学とは比較にならぬほど純粹であつた。中国は過去において、自己と同等もしくはそれ以上の文化とは接していない。中国に隣接する文化圏であるインドも、文学に関する限りは、ほとんど相互に影響関係を持たなかつた。第一、この二国の間の交通は、近世に至るまで困難を窮めたのであつて、唐代における玄奘三蔵の求法の苦心が、それを物語っている。だから中国文学は、非常に長い歴史と広い地域とを占める文学ではあるが、その一方ではきわめて純粹に、一つの民族の中で育まれてきた文学と言うことができるのである。このことが当然、中国文学の性格を規定する大きな原因となつた。例えば中国文学の歴史には、一九一七年の文学革命に至るまで、飛躍的な轉換というものがない。したがつてこれも、いわゆるアジア的停滯性の一現象とされたこともあつた。しかし、中国文学は決して停滯したまま動かなかつたわけではない。その發展の過程については後に述べなければならぬが、大まかに言えば、中国文学の發展は、二つの文学理論ないしは文学精神、小さな点では文学上の技法の対立と葛藤から生まれるよりも、前時代の文学が自壞作用をおこし、一種の空白が生じてから、新しい文学が生ずるといふ形をとることが多い。そしてその新しい文学というのは、結局、前時代を飛び越えたもう一つ前の時代を理想とする、復古運動の形で起ってくるのである。ただ中国文学は、異質の文学に触れて、根柢から揺り動かされるといふ契機を持たなかつたのである。中国文学史を通じてその上にはいくつかの轉換点が存在する。ただ、轉換のしかたははなはだ緩慢であつて、一挙にして改まるということはない、ついに存在しなかつた。

もっとも、以上はごく概略の説明に過ぎない。中国文学の歴史を仔細に検討するならば、その中にはいくつかの非中国的要素を認めることができる。その第一は、さきに述べた中国内に住む少数民族の文学である。彼らの

大部分は文化も低く、文字も持たない。しかし彼らの間にも、口で語り伝えられる文学、すなわち伝説・民謡の類はあった。それらがたまたま、漢字に翻訳され、今に伝えられる場合がある。「勅勒歌」のこともその一つであった。

勅勒歌

勅勒歌

勅勒川 陰山下

勅勒の川 陰山の下

天似穹廬 籠蓋四野

天は穹廬に似て 四野を籠蓋す

天蒼蒼 野茫茫

天は蒼蒼 野は茫茫

風吹草低見牛羊

風吹き草低れて牛羊を見る

また、古い中国の小説の中には、周辺民族の説話かと思われるものを記録した例が、ないではない。しかしこれらはおしなべて、一つの勢力として漢民族の文学に影響を与えるほどの力はなかった。最近の中国では、これら少数民族の口承文芸を採集することに力を注いでおり、それらの中にはすぐれた作品のあることもあるが、そのような作品も、過去の中国文学に対しては、力を持つてはいなかったのである。

ただし、中国周辺の民族が中国内に入ってきて、中国文学の制作に加わる例は、ないことはなかった。ことに中国では、昔から何度か異民族の王朝に支配された例がある。それらの王朝の統治者たちが中国の詩や文を作ることは、いくらかあった。しかしこれも、日本人が漢詩漢文を作るよりはもっと忠実に中国文学を模倣しようと

したものであって、大体は価値の高い文学とは言えない。例えば清の納蘭性徳（ナラン・キンデ）の『飲水詞』のごときは、中国人にも好まれたすぐれた文学ではあるが、中国文学にとつて異質の存在といふことはできないのである。また、中国歴代のすぐれた文人を考えてみても、例えば李白（リハク）（七六二—七六六）は西域に住む異民族の血を引き、清の蒲松齡（ホシヤウ・レイ）（一六四〇—一七〇六）はアラビア系の混血と推定されており、それらの文学はたしかに、当時にあつては異彩を放つたものではあるが、やはりこれによつて、中国文学が全く異質の文学の洗礼を受けたと見ることはできないのである。

第二に、さきには中国文化の孤立性を強調したけれども、実は歴史的に見て、中国の國際的地位は必ずしも孤立してはいなかつたという事情がある。近世に至つてヨーロッパ諸国の中国侵略が始まるまでは、中国は東洋における、というよりも世界第一級の強国であつた。漢・唐の都長安、明・清の都北京は、いずれも当時における世界第一の都会であつて、ことにその最盛期、たとえば漢の武帝（前一二—八七頃）、唐の玄宗（七一—七五五頃）、清の康熙・乾隆（一六八六—一七九五）の時代には、これらの都市はいずれも國際的な性格を帯びており、中国は世界帝國の様相を示していたのである。したがつて歴史的に見るならば、漢代ではアラビア馬の輸入によつて馬匹が改良され、葡萄酒をガラスのコップで飲むようになったし、漢末から六朝（りくちよう）にかけては仏教が流入して中国人の宗教生活に影響を与え、インドの僧が山河を越えて中国に入つたし、唐にはふたたび西域との交通がひらけて長安にはペルシャの店が開かれ、明・清になると西洋の宣教師たちが、新しい文物を携えて渡來した。しかし、これらの事実を通じて、中国文学はほとんど動くことがなかつたのである。

先ず第一に、仏教を媒介とするインド文学の影響について見よう。大体、中国には原始信仰のほかに宗教と名づくべきものが存在しなかったから、宗教に関する限りは外国からの影響が非常に大きい。仏教と中国古来の民間信仰、及び老莊ろうそうの思想が習合した道教が、とにかく中国的なものであるが、そのほかには仏教（これもほとんど中国化したものではあるが）・回教（イスラム教）・ゾロアスター教・キリスト教のごとき外来宗教が、中国の宗教となっている。そのうち、今日にも勢力を持つのは仏教とキリスト教および回教であるが、少し前までは、仏教の力が圧倒的であった。しかし中国近世の仏教は、非常に中国化したものであるのみならず、仏教の思想上の地位、僧侶の社会的地位は、必ずしも高いものではないばかりか、時にははなはだしく輕蔑されている（僧侶の社会的輕視については、『水滸伝』の魯智深、『阿Q正伝』の小尼姑などの例がある）。

しかし仏教が初めて中国に輸入されてからしばらくの期間、仏教は中国思想の上に非常に清新な影響を与えたものであった。そして、仏教の教義の輸入は、当然に宗教のみの輸入にとどまらず、それに付随してさまざまなインドの學術文化が輸入されてきた。たとえば論理学、音韻学などがそれであり、ことにインドの音韻学が中国音韻学を飛躍的に發展せしめたことは、中国語学史上一ちじるしい事実である。したがってこのようなインド文化の影響が、中国文学の上にも及んだことは当然に予想し得る。にもかかわらず、その点についての研究は、まだ十分に行きとどいていないと言いたい。というのは、よほど精細に調査しなければならぬほど、その影響が微弱だということを意味する。つまり、少し調べればすぐ氣のつくような明瞭な、重大な影響のしかたではないのである。それは、仏教に当然伴う仏教文学、ないしはインド文学について、当時の中国人が注目しなかったか、あるいはそれを拒否したかに大きな原因があろう。仏教が伝来したとき、この異質の思想と中国伝来の儒教との

間に神滅不滅論のような激しい論戦が展開された。しかし同じく中国文学にとって異質の文学であるインド文学は、別に何の問題も起こしていない。それだけインド文学は無視されてしまったのである。

仏教が中国に伝播しはじめた六朝の時代は、貴族文学の盛期であった。そして一種の芸術至上主義が世を風靡していたのである。したがって仏典に關する知識は、一つの新しいアクセサリーとして、士大夫しだいふの間にもてはやされた。さほど熱心な信者とは見えない詩人の作品にも、仏典の言葉などが引用される。ことに唐代の寺院は一種の行樂地であり、多くの詩人が遊んでは詩を残した。当然、仏教くさい言葉が用いられることは多いが、それがそのまま作者の宗教生活を示すことにはならないのである。

また、中国には由來、文学理論の專著が乏しい。古典文学の時代における唯一といつてよい体系的な著述は、劉勰りゅうけつ（四六三）の『文心雕竜』である。この作者は、寺院で養われ、仏教に通じ、仏典の翻譯にも従事した人であった。抽象的な文学理論を構成しようと試みた動機には、おそらくインド哲学の示唆があったであろうと思われる。ところがこの書の内容を見れば、理論の基礎となっているのは、やはり儒家の文学理論であった。仏教的な思想は、少なくともナマの形では、入りこんでいないのである。すなわちインド的な考え方は、儒の教えに基づく文学理論を体系化し、強化するのに役立っただけで、それを震撼させるような方向へは向かっていなかったといえよう。

もつとも中国文学史を見ていくと、さほど目立たぬところでは、インド文学の影響が残っている。四世紀のころから中国には、少しずつ小説と名づけられる作品が出てきているのだが、その中にはなほだ奇怪な、空想的な物語が多い。そしてその中には、明らかに仏教説話ないしはインド説話の焼き直しと見るべきものが存在する。

おそらく中国人たちは、インド説話の持つおもしろさに惹かれてこれを書いたのであろうし、それによって、空想的な物語の興味を知ったとも考えられよう。とすれば、インド文学は中国にフィクションのおもしろさを伝え、中国の小説の成熟を促したという点で、大きな役割を果たしたことになる。また、仏教の説教に用いられる俗講（ぜくこう）と呼ばれる語り物が進化して、中国の民間文芸（口誦文芸）となり、それが『三国志演義』『水滸伝』のごとき傑作を生み、ひいては『紅樓夢』を生んだ。その意味ではこれは文学史上重要な問題ではあるが、仏教の影響としては副次的なものと言えよう。

ただし小説史上におけるインド文学の役割は、まだ十分には解明されていない。そしてたとえ、それが大きなものであったとしても、中国文学の伝統に対して大きな衝撃を与えたことにはならないのである。というのは、小説は文学の正統とは認められていなかった。フィクションの文学は、文学には違いないが、詩文などに比べれば、低次の文学と認められていたのである。要するにインド文学は、そのインド的な性格によって中国文学と対決するよりは、伝統的な文学觀念の裏うちとして用いられ、あるいは中国文学の最末端に、タネを提供するという形で関与していたにすぎない。いずれにしても中国文学の伝統は、揺るがなかったと言つてよいのである。

ヨーロッパ文化が中国に輸入されはじめたときにも、同様の事情があった。それは明代から徐々に浸透し、清代には日蝕についての東西の天文学の対立があり、西方の勝利に帰したことは有名な事件であるが、これらの時期を通じて、文学の面における交渉は、問題とならなかったのである。例えば中国と近東諸国との交流は古くから存在したにもかかわらず、『アラビアン・ナイト』が中国に紹介されたのは、十九世紀も終り近くになってから

のことである。もとより自然科学と違って、文学の輸入には言語という大きな障害があるのだから、外国文学の理解には大きな困難が伴う。日本においても、西洋文明はまず物質文明として入ったわけだが、日本の場合には鎖国という特殊事情があつて、それが解けた明治維新では、精神文化も一時に流入した。中国の場合はこれと異なるのであつて、朝廷は時にキリスト教の布教を禁じたこともあつたが、交易そのものは常に門戸を解放していたのである。それにもかかわらず、中国人は文学に目を向けようとしなかった。というより、そもそも西洋に文学の存在することを、認めていなかったらしいのである。

大体、中国の正統的文学は、知識階級、いわゆる士大夫階層の独占物であつた。彼らは子供のころから文学に関する教養を受けるのであり、それがなければ、文学を作ることはもとより、鑑賞することもできないと考えられていた。その教養とは、結局は文学に関する深い知識であり、また聖賢の教えに対する理解である。そのような教養を受けていない西洋人は、いかに物質文明が進んでいようとも、結局は夷狄^{いてき}であり（部分的に夷狄を学ぶことは、中国人は必ずしも否定しない。例えば戦術で、それまでの車戦を騎馬戦に変えた戦国時代の胡服騎射のときはその一つである）、その人々の間に文学が存在しようとは、中国人にとって、想像もできないことだったのである。そのほかに、辛うじて存在を認められたものは日本や朝鮮における摸倣文学に過ぎない。しかしそれにしても、その摸倣文学を入口として日本や朝鮮の文学を探ってみるならば、そこには中国文学にとって新鮮な、異種の要素を発見し得たはずである。しかし中国の人々は、日本や朝鮮に摸倣文学以外の文学があるとは認めなかった。したがって、みずから異質の文学の中に新しい栄養素を摂取しようという意欲は、全く示さなかったのである。